

## チュニジアから見える未来 —北アフリカ研究センターの活動を通して—

青柳悦子

人文社会科学研究科助教授

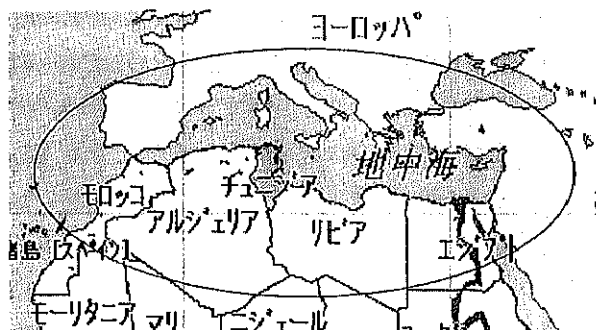
昨年4月に本学に発足した北アフリカ研究センター(Alliance for Research on North Africa; 通称ARENA、センター長:生命環境科学研究科安部征雄教授)に文系のスタッフとして関わっている。おかげで、これまで思いもしなかった経験をしたり、新たなヴィジョンを得たりしている。その一端をご紹介します。

### チュニジアとの出会い

私はフランス系の批評理論を中心に研究している文学研究者である。おそらくフラ

ンス語ができるということで、チュニジアに行ってみないかと声がかかった。モロッコ・アルジェリア・チュニジアのいわゆるマグレブ三国は旧フランス植民地であり、今でもフランス語が広く使われている。

それが2003年、年明けのことであった。それまで筑波大学は、海洋科学・IT(情報技術)・乾燥地研究・バイオテクノロジーなどの分野でチュニジアとの交流を蓄積してきたが、前年春に同国を訪問した北原保雄学長(当時)が、この国および北アフリカ地域の可能性を強く認識し、文系にまで



チュニジアは地中海の中央にある

交流の幅を拡大する方針になったという。学長に通訳として同行した青木三郎助教授（人文社会科学研究科）が日本側の中心となり、日本＝チュニジア人文・社会科学シンポジウムをチュニスで開催することになったので、それに参加してみないかという誘いであった。

こうして2003年5月にはじめてチュニジアを訪問することになり、翌2004年、ARENA発足後の6月に、理系と文系を総合した日本＝チュニジア文化・科学技術シンポジウムのために、再び同国を訪ねた。

### “平和国家”チュニジア

行ってみて驚いたこと、意外だったことが沢山ある。

まず、チュニジアが“安全な”国だということだ。

私は90年代初頭にフランスに留学していたのだが、この時期、アルジェリアでイスラーム原理主義が台頭し、爆破事件や騒乱などが相次いだ。日々そうしたニュースに触れ、マグレブは治安が悪く、混迷の泥沼のなかにある、という印象をもっていた。多くの方も同じイメージではないだろうか。

ところがチュニジアは、1956年の独立後、一度も大きな社会的混乱を経験していない。軍事費も極端に少なく、対外的な軍事行動を起こしたことがない。経済発展と教育に

力を入れて順調に成長してきた“平和国家”なのだ。

社会が安定し経済状態も良いためか、町を歩いていても危険な感じや不安な感じはない。その裏には、アムネ스티などから絶えず厳しい批判を受けているほどの言論統制や、警察などによる厳しい治安維持の活動があることも否定できないだろう。

たしかに“表現の自由”は制限されているようだ。とりわけイスラーム原理主義の活動を、チュニジアは徹底して禁じている。政権も恐ろしいほどの長期安定。建国以来、まだ二人の大統領しか出ていない。しかしその代わりに、安全で、明日のために努力を積み重ねることのできる日々がある。国家の最優先課題がデモクラシーとは限らないし、デモクラシーにもさまざまな実現形態があるということを考えさせられる。

### 多文化融合の地

チュニジアはまた、民族紛争のない国である。歴史的にも、この地は、民族対立よりは民族融合の地であったようだ。

北アフリカ地域の多くでは、先住民であるベルベル人と、多数派であるアラブ人との間の紛争が絶えない。しかしチュニジアではベルベル人のイスラーム教徒化、アラブ人との民族混交が進んできた。顔を見れば、いかにもアラブ的な人、イタリア



海辺の町に遠足に来ていたチュニスの小学生たち。子供も大人も、チュニア人は解放的。

人に近い人、ベルベルの面立ちの人、そしてさまざまな程度にこれらの特徴が入り混じった人など、実に多様であるが、彼らは皆、ただ、同じ“チュニア人”として生きているようだ。

文化や生活様式における混淆も楽しい。国民の98パーセント以上がイスラーム教徒だというのが、少なくともチュニスなどの大都市においては、服装は完全に西欧風。フランスパンを常食し、一方デザートはアラブ菓子。飲酒を避ける人もいるが、ワインを飲むことも問題ない(おいしいチュニアワインが豊富に産出されている)。とくに教育の行き渡った若い世代は、母語であるチュニア方言のアラビア語と、いわば文語である古典アラビア語、そして小学校3年から修得して日々の生活にも用いているフランス語を、誰でもが話す。言ってみれば、国民全員が、アラビア語＝フラン

ス語のバイリンガルなのだ。

食べ物のおいしさ、衛生状態のよさも予想外だった。人々はおだやかに明るい。適度に勤勉で、そしてとても親日的だ。「小さいときから日本人を見習え、日本を見ろ、と言われてきた。日本人大好き」と言ってくれる多くの若者。スペインでは中学生に日本の位置を教えるのに苦勞した覚えがあるが、ここでは日本は、人々の意識の中に確かな場所を占めている。

国家予算の2割を教育につき込む世界最高の教育投資国。石油資源がほとんどなく、産業の振興で国の発展をめざす努力型の国家。男女平等の模範国。イスラーム世界と西欧世界の架け橋となりうる前向きな多文化社会。こんな国チュニアをなんとか応援したい。そんな思いが満ちてくる。

\* \* \*

現地での見聞は私に無数の発見をもたらした。しかしチュニジアないし北アフリカ地域に対する私の認識を根底的に変えてくれたのは、ARENAに関わる先生方だった。

### 砂漠は資源の宝庫

砂漠は不毛の地だと思っていた。ところが砂漠は、宝の山であるらしい。

バイオテクノロジー分野のバイオプロスペクティング（有用生物資源探査）という研究活動にとっては、乾燥地の植物は——これまでは見過ごされてきたのだが——無限の可能性をはらんでいるという。

高温・乾燥・日射・高塩度のなかを生育する乾燥地植物は、すぐれた抗酸化物質を内包していて、これを効率的に取りだし、有効に活用することで、癌、動脈硬化、アルツハイマー症などの治療・予防に役立つ医薬品、健康増進やダイエットのための高機能性食品、育毛・美白などの効果をもつ化粧品、抗菌剤・抗カビ剤、食品保存剤など、現代社会の多くの課題に応える新製品を開発することができるという。

これは爆発的な産業育成効果・経済効果につながる研究である。筑波大学を中心とする日本の研究者の先端科学技術と、現地の生物資源および研究蓄積とを融合させて、世界中の人に恩恵をもたらすような開発を推進する。援助や搾取ではなくパートナー

シップによって、これから伸びようとする北アフリカの国にも、停滞期を迎えたと言われる日本にも、新たな富と発展をもたらす。欧米中心の世界の勢力地図を書き換える。こんな夢が実現できそうなのだ。

準備のすでに整っているチュニジアでは、新たなテックパーク建設のバイオ部門の中核にこの研究開発が位置づけられ、日本の国際協力銀行（JBIC）と国際協力機構（JICA）が支援を決めている。この研究をリードしているのが、若さに溢れる中堅の先生方（宮崎均助教授、磯田博子助教授、中村幸治助教授；いずれも生命環境科学研究科、ARENAメンバー）であるのも頼もしい。

### 北アフリカは人材の宝庫

もうひとつ、画期的だと思うのは、ARENAのIT部門を担う井田哲雄教授（システム情報工学研究科）の活動である。すでに3年間、井田先生はチュニジア、カルタゴ11月7日大学のINSAT（応用科学研究所）で、大学院生に、IT研究者育成のための授業をおこなっている。

井田先生によれば、チュニジアの学生は原理的な思考力に富み、意欲にも優れているという。中世イスラーム社会以来この地は優秀な科学研究者を輩出した人材の宝庫であったし、考える力を重視するフランス風の教育体制と、欧米の一流研究者との密

接な交流が可能な環境とがそれに加わって、有望な人材がどんどん出てくるのだという。

一方、筑波大学でも、北アフリカ地域からの留学生や受け入れ研究者が、徐々に増えている。彼らの真摯で柔和な様子を見ると、こうして育っていく人々がどんな時代を築いてくれるのか楽しみである。教育には夢がある、と改めて実感する。

翻って文学研究においても、北アフリカ地域を視野に入れることで新しい展望が生まれてくる。欧米の数カ国のみをターゲットとした研究の構図が、今後変化していくことは必至だ。チュニジアでは現在、アラビア語・フランス語の両面で、文学生産が飛躍的に活発化してきている。

地中海南岸の小さな美しい国チュニジアから、私たち自身の未来が見えてくる、と感じている。

(あおやぎ えつこ／文学研究)